

牛久：学校周辺に見る自然

第58号 ひたち野うしく小（ひたち野西近隣公園）

2011年12月4日発行

＜秋の水辺公園、生きものたちの冬越し準備 ～8. その他の昆虫、クモ＞

11/8、ひたち野うしく小4年生との水辺公園、秋の生きもの観察。今回は、虫たちの冬越しから、前号、前々号で紹介したチョウ、とんぼ、バッタ、カマキリ以外の昆虫とクモについて。



まずは、ハナアブの仲間から、ホソヒラタアブ。カタバミの花みつをなめていました。ハナアブの仲間は、見た目がハチによく似ていますが、よく観察すると、いろいろ違いが見つかります。口の形もその一つで、ハチはみつを「吸う」口をしています。ホソヒラタアブの仲間はみつや花粉を「なめる」口をしています。そう、ハナアブはハエに近い仲間なのです。ハナアブの仲間は、樹皮の下などせまいすき間にもぐりこんで、成虫で越冬しますが、ひざしのある暖かい日には出てきて、花のみつをなめたりします。

←カタバミのみつをなめる、ホソヒラタアブ(成虫越冬)。



次は、パッと見てハエと分かりますね。ニクバエ科や、イエバエ科とよく似たヤドリバエ科の仲間のようなようです。調べてみたら、35号でふれたオオミノガヤドリバエのようです。が、資料が少なく自信ありません。詳しい方がいらっしゃいましたら、教えてください。交尾していましたが、ミノの中のオオミノガ幼虫の体内で、1齢幼虫で越冬するそうです(鹿児島昆虫同好会例会資料より)。

← 交尾中のヤドリバエ科。オオミノガヤドリバエ？



さて、こちらは何の幼虫だと思えますか？イモ虫のような姿から、チョウかガの幼虫と思いがちですが、じつは、ハグロハバチというハチの仲間の幼虫です。集団でギシギシの葉を食べていました。写真左のように丸まっているのが多いようです。幼虫で冬を越し、霜で凍りつくことがあっても、気温が上がって霜がとけると、再び活動しだすそうです。なんともタフな幼虫ですね。

← ギシギシの葉をむさぼり食う、ハグロハバチ(幼虫越冬)。



↑アシナガバチの巣(左)とドロバチの巣(右). アシナガバチは朽木中で新女王(成虫)のみ, ドロバチは巢内で幼虫越冬.

ハチの巣も、見つけましたね。左は、壊れていて種名まで分かりませんが、アシナガバチの仲間の巣です。アシナガバチは人家の近くにも巣を作ることが多いので、刺されたという話もよく聞きますが、スズメバチよりはおとなしく、刺されるのはたいてい巣を壊そうとしたり、うっかり巢に触れてしまったようなときです(私の場合も、植生調査でヨシ原にずんずん入りこんで巣に当たったときでした。)。庭木のケムシなどを食べてくれる益虫でもあり、うまくつき合っていきたいものです。アシナガバチはスズメバチ同様、秋に交尾した新女王だけが朽木の中などで成虫越冬し、それまで使っていた巣は空になります。春に新しい巣をつくるまでの間、えさも食べずに冬眠状態だそうです。右はドロバチの巣。春に見つけたのが、そのまま残っていました。よく覚えていて、私を呼んでくれましたね。巣の中で、幼虫(～さなぎ)で越冬するようです。



↑暖かさに、もそもそと出てきたナナホシテントウ。成虫越冬。

ナナホシテントウも、お日様の暖かさにひかれたのか、もそもそと出てきましたね。本当に、おおぜいで探すと、いろいろな生きものが見つかります。テントウムシの仲間は成虫で冬を越すものが多く、石の下や樹皮のわれ目、草むらなど冷たい風が直接当たらない場所において、複数で集まっていることもあります。テントウムシは、低温にさらされても体が凍りつかないしくみがあり、ナナホシテントウでは-20℃くらいまで耐えられるそうです。びっくりですね。



↑えものを待つ、ジョロウグモのメス。卵で越冬。

こちらは、ジョロウグモ。秋に産卵するクモの多くは、ふ化した幼体で冬越しをしますが、ジョロウグモは卵で越冬します。暖地性のクモだからでしょうか？産卵直前は腹が大きくふくれています。産卵直後はほっそりして、別の種のように見えます。寿命は約1年で、親グモは産卵後、冬を越せずに死んでしまうのです。メスの腹の赤いものは、「婚姻色(こんいんしょく)」といって、繁殖期になると現れるものです。

【理科支援員 宮内】